
< 番外編 > ゼロ魔・試作品？

zac

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

<番外編>ゼロ魔・試作品？

【Nコード】

N2730U

【作者名】

z a c

【あらすじ】

読んで字のごとく（笑）：ゼロ魔・試作品？の番外編です。

本編の流れ的に書けなかった話とか、もし話がこういう流れになつていたらのIF話とかを、載せる予定です。

この番外編は、その時の思いつきが90%で、本編には全く関わらないと思います。

作者のノリで書いたモノなので、悪ふざけとか冗談だと思って見て下さい。

その1：特設ステージ … IFもう一つの未来…（前書き）

この話は、ゼロ魔・試作品？のIF16話です。

15話まで読んでから、見る事をおすすめします。

その1：特設ステージ … IFもう一つの未来…

「ほら！おとなしくここに入れっ！！」

さんざん暴れながら、兵士達に引きずられて地下牢まで連れてこられたルイズだったが、抵抗むなくあっさり独房に放り込まれた。

「い、痛〜〜い！この無礼者〜〜！！」

放り込まれた時にぶつけた体をさすりながら、起きあがって兵士に怒鳴ったルイズだが、兵士達は独房に鍵をかけ、去ってしまった後だった。

そのため扉を蹴ったり叩いたりして叫んだが、どんなに呼んでも誰1人やってくる事はない。

仕方なく部屋の中を見回してみるが、独房と言うだけあって部屋はかなり狭い。

広さは、だいたい2メートル×2メートルくらいで、天井付近に小さな小窓がついているが、脱出はおろか外を覗けるはずもない高さであった。おまけに明かりもその小窓と扉の隙間から漏れる光しかないため、酷く薄暗い部屋だった。

そして、窓とは反対の角に小さな衝立があり『何だろう？』と覗いてみると…おまるが1つポツンと置いてあった。

おまる…つまりポータブルトイレである。

おまけに寝床と思われる位置には藁がひかれ、横には毛布が置かれていた。

『ベットもないなんて…』

あまりの事に、目の前が真っ暗になったルイズ。

「な、何で使い魔のサイトだけ優遇されて、主人である私だけがこ

んな目に……」

自分の理不尽さを忘れて、サイトを恨んだルイズであった。

ガチャガチャ！

独房の鍵を開ける音に、驚いて飛び起きたルイズだったが、ルイズが動き出すより早く屈強な兵士に囲まれて、あっという間に後ろ手に縛り上げられ、ひも付きの首輪までされたのである。

「ちょ、ちよつと何するのよ！！首輪^{これ}を取りなさい！！！」

怒りと屈辱に震えながら、兵士を怒鳴りつけて抵抗しようとしたルイズだったが、無言の兵士に首輪についたひもを引っ張られて首が絞まり、窒息しないように小走りで兵士について行くしかなかった。暗い地下の独房で一晩過ごしたルイズ、昼食は仕事が遅かった為にありつけず、夕食は出たが、野菜クズのスープと硬いパンという物だったので拒否して食べなかった。

自業自得ではあるが、空腹でフラフラである。

なのに、暗い地下道を兵士に引っ張られて、延々と歩かされていく。どれほど歩いたのか？もう暗闇から出られないのでは？と、不安になり始めた頃

やっと、明るい外に出られたのである。

どうやら城の中庭らしいが、大勢の人がひしめく場所に連れてこられたようだ。

周りには人があふれているが、舞台の観客席のように中央部分を丸く残し、周りを取り囲んでいるのだった。

あまりの人数に一瞬息を呑んだルイズだったが、今の自分の格好を思いだし、

「なっ！これはどういう事？離せ！！離しなさい！この無礼者！！」

と暴れて叫んだが、兵士達は意に返さず、群衆の中にポツカリ空いた道を中央へと進んでいった。

そして、中央部分の1段高く作られたお立ち台…丸い台座の中央に頑丈そうな椅子が固定されている…に、ルイズを乗せ縛り付けたのである。

椅子に座らされてからも、暴れていたルイズだったが、ファンファールと共に正面に人が現れたため、驚きで暴れるのをやめたのだった。

よく見ると、出て来たのは…何故か全身真っ黒な衣装を身に着けたミレーヌやミスターSと年配の男女が数人である。

そして、ミレーヌ達の前は、ルイズの正面に用意された席に座わり、その後にサイトが呼ばれて、ミレーヌ達の右隣の席に座ったのだった。

そう、ここはルイズのために作られた特設のステージ…法廷だったのである。

「さてルイズ、あなたは私の賓客であるサイトさんに、理由無く暴力をふるいましたね？」

裁判長の席に座るミレーヌが、席に座るサイトを示しそう質問する。

「理由無くじゃないわ！！こいつは使い魔の分際で、ご主人様を助けなかったのよ！仕事をしない使い魔なんて、頭の悪い犬よっ！叩かれて当然じゃないの！！使い魔を躰るのは、主人の権利よ！！」

傲慢にそう言いはなったルイズだが、見物客：傍聴人達は、そんなルイズの態度にドン引きである。

『使い魔の分際？』

『え？だって彼は人間だろう？』

『叩かれて当然っ……て？』

『犬猫にだって、鞭で叩くなんて……そんな事しないだろう？』

『だいたいそれって、傷害罪だよな？』

『それに、人様を犬呼ばわりって酷くないか？』

『そうだそうだ！名誉毀損もプラスじゃないのか？』

あまりの所業に、人々が顔をしかめる

しかし、そんな人々の白い目線を気にする事もなくルイズの暴言は続く

「だいたいあんただって、この私を誘拐して、勝手に使い魔にしたのよ！？トリステイン貴族である私をこんな目にあわせて！！許されないわよっ！！」

1つため息をついた後、ミレーヌはルイズに問いかける。

「使い魔の召喚は、何においても優先されるのではなかったのかしら？例外は認められない」

「そ、それは……」

ルイズが黙り込んだところで、年配の女性裁判官が、サイトに向かって質問した。

「では、サイトさんに質問します。あなたは、このルイズの使い魔だそうですが、望んでそうなったのですか？」

「違います！！俺…私はトリステインじゃない国から、このルイズに召喚されましたが、召喚時も俺…私の意見を聞く事もなく、訳が分からないうちに使い魔のルーンを刻まれました。驚いてイヤだと言ったら、『お前は平民だから、貴族であるルイズに仕える事は当たり前だ、死にたくなければ、逆らうなって言われました。』」

「そうですか…分かりました。サイトさんありがとうございます。」

次に壮年の男性裁判官が、サイトに質問する。

「君は今回ルイズによって暴力を受けたが、ルイズの言によれば『仕事をしない使い魔は頭の悪い犬、叩かれて当然』らしいが、以前からこのような暴力を受けていたのかね？」

「はい、ルイズの言う事を聞かなかったり、ルイズの機嫌が悪い時には鞭で叩かれましたし、犬の真似事もさせられました。」

「犬の真似事？具体的には何を？」

「犬の首輪を付けて紐で引かれ、学園内を引き回されたり、『犬だから人間の言葉を話すな、ワンと鳴け』と言われてワンと鳴かされました。」

「そんな状態で、他の人はやめると注意しなかったのかね？」

「ルイズはトリステインの貴族…それも公爵令嬢です。平民にどんな理不尽な事をして、誰も文句は言いませんよ！だいたいトリステインでは、他の貴族達だって、平民に対する扱いは同じですよ」

ザワザワザワ…

傍聴席からは息を呑む音や非難の音が響く、その声に腹を立てたルイズが、

「何よっ！平民の分際で！！鞭打たれたのは、由緒あるトリステイン貴族の私に逆らうあんたが悪いんでしょ！！」

と怒鳴り返す。

「分かりました、サイト君ありがとう。ルイズ、君には発言をゆるしていないかったんだがね」

ルイズに男性裁判からの注意があった。

「聞いた時には悪い冗談かと思ったが、トリステインでは、子供の頃からこのような劣悪な選民意識を助長させる学校に通わせているとは…驚きだ！」

そして男性裁判官は、嫌悪も新たにそう吐き捨てるように言い、初めに質問した年配の女性裁判官も、

「ミレーヌ様が仰ったとおり、この国以外では、貴族にしか人権はなさそうですね…しかし、この国では違います！全ての国民に人権があります。」

その言葉に、傍聴席から大きな拍手が湧く。

そして最初から黙って聞いているミスターSに皆の視線が集中した。

「よろしい、では裁決を取ろう。ルイズが有罪だと思つ者は起立し
てくれたまえ」

その言葉の後に裁判官全てが立ち上がる。

「う、うそっ！！嘘よっ！こんな間違いだわっ！！！！」

ルイズが叫ぶが、誰も聞いてない。

そして、ミスターSから判決が言い渡される。

「裁決は全員一致で有罪…死刑だ！本当なら、ここで死刑が言い渡
されず処刑となる。

だが、何が悪いのか分かっていないお前では、そのまま処刑しても
反省しようがないだろう。なので、処刑は1週間後とし、処刑まで
の1週間で、サイト君が味わった苦しみを全て罰としてお前に与え
る事しよう。」

「な、何ですって……！？」

「罪人ルイズ！この後、広場にて鞭打ち30回！そして、今日より
処刑までの7日間は毎日20回ずつの鞭打ちと鉋山での重労働だ！
しっかり働けよ？！

そして今からは、お前を犬として扱う事とする。お前は犬だ！犬は
人間の言葉を喋る事はならん！鳴くならワンと鳴け！」

「な、何よそれ！！！！冗談でしょお……！！！！」

「むろん冗談ではない。さあ！衛兵準備をしたまえ！」

「はい！さあルイズ来い！！！」

「い、いや~~~~~！！放して~~~~~！」

暴れるルイズを、兵士達が引きずって行く

「うるさいぞ！！黙って歩け」

「そつだ鳴くならワンだ！！」

「おい！2本足で歩くなよっ！」

「そつだそつだ！犬なら4つ足だろう！！」

傍聴席から、ルイズにヤジが飛ぶ！！

哀れルイズ…こうして、使い魔から犬に格下げされ、7日間で計150発の鞭を受け、鉱山で休む暇なく働かされて、最後には処刑されたのであった。

もう一つの未来…BAD ENDにて、ハルケギニアからルイズ退場

その1：特設ステージ … IFもう一つの未来…（後書き）

実際、こんな終わり方もあるんじゃないか？と思ってたんですが、書いてみて『これじゃあとリスティンに行かずに終わってしまう』ので、番外編として載せました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2730u/>

<番外編>ゼロ魔・試作品？

2011年6月22日12時32分発行